

全林研会長賞

岡山県

真庭森林・林業研究会

所在地 > 岡山県真庭市

設立 > 平成17年8月

会員 > 男29人 女12人 年齢 > 35歳～74歳 平均60歳

主なプロジェクト

- ◆ 未来に引き継ぐ真庭の森づくり（協働事業）
- ◆ 高齢林現地調査

◻ 未来に引き継ぐ真庭の森づくり ◻

1. 地域の概要

真庭地域は、岡山県の北部、中国山地のほぼ中央に位置し、総面積は約8万9,500haで県土の12%を占めています。真庭市と真庭郡新庄村で構成されています。

地域の森林面積は約7万1,700ha、林野率は約80%、民有林の人工林面積は約3万7,000haで人工林率は約57%と県平均（39%）を大きく上回っています。また、齢級構成では、7～12齢級が約75%を占め、適正な間伐実施と齢級構成の平準化が課題です。

地域ではこれらの豊かな森林資源を背景に、古くから林業活動が行われており、原木市場3カ所、製品市場1カ所、製材工場約30社が集積し、製材加工から木材流通にいたる「美作材」みまさかざい産地が形成されています。

また、真庭市では「バイオマス産業杜市構想」掲げ、関係業界と一体となってバイオマス資源の利活用を進めていますが、なかでも未利用材を主な燃料とする「真庭バイオマス発電所」が平成27年4月に稼働開始したところであり、山主への利益還元や雇用創出など、地域の林業・木材産業の新たな推進エンジンとの期待が高まっています。

2. グループの結成

真庭地域では当時、7つの林業研究グループがあり、旧町村単位で活動していましたが、町村合併を契機に真庭の全域を一つの活動エリアとする「真庭森林・林業研究会」を平成17年8月に結成しました。会員数は林家、素材生産業者、苗木生産者、家具職人など、幅広い構成となっています。

3. 活動の内容

当研究会では、研究会活動に会員が参加して実施するほかに、従前の林研グループによる地域密着型の活動や、会員が独自に行う取り組みについても研究会の活動として捉えて情報共有し、今後の取り組み等に活かしています。

(1) 研究会活動

① 真庭産優良材品評会

「真庭産優良材品評会」は、優良材の産地形成と保育技術の研鑽、地域木材産業の振興を目的として、平成7年から実施しています。

地域の森林所有者から出品されたスギ、ヒノキ材(80～100点)について、目揃いや色艶、枝打ち・間伐等の実施状況、樹種・径級



審査の様子

に見合った造材について審査するとともに、県森林組合連合会勝山共販所での落札価格を加味して入賞者を決定しています。

受賞は森林所有者の励みになっており、優良材生産の意欲向上につながっていることから、今後とも継続実施していきたいと考えています。

② 未来に引き継ぐ真庭の森づくり

平成16年の台風23号は岡山県に甚大な被害をもたらし、真庭地域においてもスギ・ヒノキ人工林に大規模な倒木被害(被害面積1,338ha)が発生しました。

この災害を契機に、今後の山づくりをどのように進めるべきか検討するため、平成17年に当研究会、森林組合、行政機関、木材組合等による検討委員会を設け、台風被害の実態を分析するとともに、災害に強い森づくりや長伐

期に対応した施業体系など50年、100年先の未来に向けた新しい森づくり指針を作成しました。

災害に強い森づくり施業指針では、台風被害を受けやすい森林の条件を踏まえ、スギ・ヒノキの植栽不適地には、針広混交林や広葉樹林を導入するための造成技術の要点をまとめています。また、長伐期に対応した施業体系では、真庭地域の高齢林の生育実態を調査し、そのデータから作成した収穫予想表と施業体系を提示しています。

現在、災害復旧からほぼ10年が経過しましたが、植栽木の適時適切な保育施業の実施、シカ等の獣害対策などが課題となっています。



森づくり検討委員会

③ 岡山大学農学部学生の林業経営研修



高性能林業機械の見学

青少年の林業に対する理解を深めてもらうため、平成26年に全国林業研究グループ連絡協議会の助成事業を活用し、岡山県林業改良普及協会と連携して、岡山大学農学部の学生30名を対象に林業経営研修を実施しました。

2日間の日程で、初日は、地域で素材生産業を営む有限会社寿園の間伐現場を訪問し、高性能林業機械による作業を見学しました。当研究会の会員である梶岡社長が間伐の必要性や林業における機械化の状況を説明し、ハーベスタなどによる伐木造材作業の実演を行いました。学生らは迫力ある機械の動きに歓声をあげ、林業現場における機械化の実態に驚きを感じていました。

2日目は、収入間伐の収支予測を実習しました。採材方法や木材市況、搬出経費などを学生にアドバイスしながら、対象林分の収支を推測してもらいました。また、真庭森林組合のバイオマス集積基地を見学し、未利用間伐材がチップ化されバイオマス発電向けに供給されている状況から、木が余すことなく利用されていることを実感してもらいました。

研修後に実施したアンケート調査で、「林業に関わる仕事をしたいと思っ

たか」の問いには、「思った」と「思わなかった」の回答が半々の結果となりました。また、「林業に関わる仕事をしたい」と思った学生の、将来の職業は「森林組合職員」と「林業を担当する公務員」とで全体の約60%となる一方で、「伐採・搬出の作業従事者、林業機械のオペレーター」は5%にとどまる結果となりました。

(2) 会員の活動

① 富原婦人林研クラブ

富原婦人林研クラブは、真庭市富原地区の女性11名によるクラブで、山をどのように活かして生活を楽しく豊かにできるかを重点に活動しています。



クズの新芽茶と会員

今、最も力を注いでいるのが、里山の薬草を使った商品開発の取り組みです。真庭市が

開催した「里山宝探しゼミナール」で、崇城大学薬学部の村上光太郎教授に野草の薬用効果や料理方法などを学び、身近にある野草を使ったアイデア料理を試作しています。

現在、クズの新芽、クマザサ、クワ、ヒノキ、アスナロを使ったブレンド茶を開発し、「富原やまんばあば」のブランドで本格的な生産に乗り出したところ です。

また、平成24年から県立高梁城南高校環境科学科による環境学習の受け入れをしており、薬草を使った料理体験を通して、生徒の身近な野草や里山への関心を高めています。

② MOMO工房

MOMO工房は、元井さん夫婦による工房で、県内産の広葉樹を使った創作家具づくりを20数年続けています。

MOMO工房では、廃校になった中学校を活用して「家具づくり塾」を主催し、目的や技術レベルに合わせて、木工の基礎から家具製作までを個別指導しています。また、地元の地域体験プログラムやコミュニティ活動などで木工体験教室を開催し、地域内外の住民に、木に触れる機会を提供しています。

2人とも、県立北部高等技術専門校「木工科」の職業訓練指導員の経歴があり、退任後も、同校で生徒に起業化に向けたアドバイスなどを行っています。



木工体験教室

③ 向井林業

有限会社向井林業は、高性能林業機械を積極的に導入し、路網と林業機械を組み合わせた低コスト施業を進めています。また、山主に配慮した間伐作業を心がけ、小径木などの未利用材はチップ化してバイオマス発電所に搬送するなど、林地残材の有効活用にも取り組んでいます。

向井社長は、平成26年から自らの母校である県立勝間田高校グリーン環境科で「出前講座」を実施しており、機械化による低コスト施業の取り組みや高性能林業機械の開発などについて、生徒に話を行っています。学校では、



県立勝間田高校での出前講座

向井社長の講座をインターンシップ研修(岡山県農林水産総合センター森林研究所実施)の事前学習と位置づけており、大先輩から現場の最先端の話聞くことで、多くの生徒が林業を志してほしいとのことで、私たちも大いに期待しているところです。

4. 今後の課題と目標

(1) 会員は人材の宝庫

会員数は減少傾向にあり現在41名ですが、平均年齢は60歳で高齢化と呼ぶにはまだ早い年代です。また、林家、素材生産業者、苗木生産者、家具職人など多彩な人材が集まっています。さらに、これまで培ってきた伝統の施業技術、知識をもつ「ベテラン」と、日本と同じ急峻な山林をもつオーストリアの先進林業を視察するなど、新しい技術を吸収し、理想を抱く「若者」がいます。

今後は、優良材品評会受賞者の施業技術をはじめ、発電燃料を想定した素材生産方法、皆伐・再造林一貫施業、最先端の高性能林業機械などについて

学ぶ場を企画し、伝統と革新の技術・知識を共有・伝承していきたいと考えています。

(2)「地域一体」が真庭スタイル

現在の研究会活動は役員中心となる傾向があり、会員の主体的な参加に関しては改善すべき点があると考えています。

特に地域をあげた活動する際は、関係機関との連携が不可欠と考えていますが、真庭地域では「地域一体」で物事を考えるよい風土があります。現在、地域の林業・木材関係者、行政機関等で組織する「真庭システム協議会」が、山づくり・素材生産・住宅建築・製材流通の各分野で、地域材の安定供給による林業・木材産業活性化のための取り組みを展開しています。当研究会も協議会の構成員ですが、協議会との連携を一層強化し、関係者との協働による息の長い活動を展開していきたいと考えています。

(3)「真庭」で情報発信

我々の活動は自己完結型で、外に向けて情報発信することに慣れていません。

しかし、いま真庭地域は、バイオマス発電やCLTなど、林業・木材産業分野で日本の最先端を走っています。「真庭」と名乗るだけで注目されることは、情報発信の優位性があるということですから、これを逃さない手はありません。

現在、フェイスブックを立ち上げたところであり、研究会活動はもとより、会員や個別の林研グループにも積極的に参加してもらい、情報を共有・発信して、新たな賛同者、理解者を増やしたいと考えています。